



TITLE:

創られた災害 --洪水神話から出来
事としての<津波>へ

AUTHOR(S):

鈴木, 佑記

CITATION:

鈴木, 佑記. 創られた災害 --洪水神話から出来事としての<津波>へ. 地域
研究 2011, 11(2): 139-160

ISSUE DATE:

2011-03-31

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/251324>

RIGHT:

©地域研究コンソーシアム 『地域研究』 編集委員会 2011

創られた災害

——洪水神話から出来事としての〈津波〉へ

鈴木佑記

I はじめに

災害 (disaster) という概念には、実に多くの事象が含まれている。地震や台風、噴火や津波といった自然現象だけでなく、原発事故やテロなどもその範疇内にある。必然的に、災害に関する研究の対象は幅広く、災害の定義も学問分野によって異なることがある。ここでは、文化人類学の分野における定義を取り上げたい。それは、災害とは「自然環境あるいは人が手を加えた環境あるいはまったく人工的な環境に由来し、破壊を起こす可能性のある要因／力と、社会的また経済的に作り出された脆弱性が存在する状況下にいる人間集団とが結びつき、個人また社会の物質

的身体的存続や社会秩序や意味に対する欲求の、慣習的・相対的な満足が混乱ないしは中断したと認識されるに至った過程／事象である」(オリヴァー・スミス & ホフマン 二〇〇六: 七—八) という定義である。少々わかりにくい文章だが、要点は以下の二点にある。つまり、①環境と人間社会が結びついて発生するものであり、②日常生活が混乱あるいは中断したと捉えられる過程ないし事象である、ということである。

二〇〇四年一月二六日発生のスマトラ沖地震とそれに伴うインド洋津波は、脆弱な人間社会を直撃し多くの被災者の生活を激変させたという意味で、まさに災害であった。実際、津波はインド洋沿岸広域にわたって甚大な被害を及ぼし、二〇万人以上の犠牲者を出したことから、災害史に残る大きな出来事のひとつとなった。

ところが、津波被害を受けたある地域に暮らす人々の主観的な視点からは、必ずしも災害とは認識されていなかった可能性がある。なぜなら、災害という概念自体が近代科学の知識を有する社会がつくりあげたものであり、そのような知識を持たない社会では、われわれが認識するところの災害という言葉を持たないことがありうる。そうした社会では、一般に災害と呼ばれるものをその土地特有の知識体系に基づいた言葉で表現しているはずである。

本稿では、インド洋津波の影響を受けた少数民族モーケンを事例として、モーケンにとつての〈津波^{*2}〉とは何であったのかを、彼らが被災した後に経験した出来事^{*3}に注目して明らかにすることを目的とする。対象地域は、タイ領アンダマン海域に浮かぶスリン諸島である。次節で調査対象に関する基礎的情報を提示し、インド洋津波に被災するまでの背景を説明する。Ⅲ節において、スリン諸島のモーケンが津波の襲来を予測できた理由を、メディアによる報道とモーケン自身による語りとの比較において検討する。その結果、外部者が津波として報告しているものが、当事者にとっては津波とは関係のない、日常生活の延長線上に結びつけられた洪水神話ラブーンとして認識されていたことが明らかとなる。Ⅳ節では、インド洋津波の後、タイ本土の寺院で避難生活を送り、再びスリン諸島で生活を送るなかで、モーケンがどのようにインド洋津波を〈災害〉や

〈津波〉として認識するようになっていったのか、その過程を描く。Ⅴ節では、ラジオによる津波情報やブラジル人による津波予知の報道がきっかけとなった、モーケン社会で起きた出来事に注目することで、モーケンがどのように〈津波〉を理解するようになったのか、具体的な事例をもとに明らかにする。Ⅵ節では、本稿の論点をまとめる作業を通じて、創られた災害という主題に込めた意味を説き明かす。また、災害情報の越境性に注目することで、タイの周縁に位置するモーケン社会と外部社会との接触について、〈災害〉の創造過程に着目しながら若干の考察を加えたい。最後にⅦ節で、モーケン社会と外部社会との間に横たわる断絶性について意見を述べたい。

Ⅱ 調査対象

1 モーケンについて

モーケンとは、タイ領およびミャンマー領アンダマン海域に暮らす少数民族であり、総人口は二八〇〇人とされる^{*4}。本稿で取り上げるのは、ミャンマー国境に近いタイ領内に浮かぶスリン諸島で生活するモーケンである（図1参照）。この諸島にある村落の規模は小さく、人口は二〇〇

名前後である(図2参照)。人口が不特定である理由は、他村落との間を往来する者や、一定期間のみ移住する者があり変動するためである。

しばしば「漂海民族」や「漂泊漁民」、あるいは「シー・ジブシー」などと記述されてきたように、かつては船を住居にして、広大な海域を移動しながら生活してきた人々である。住まいであり移動の手段でもある家船は、彼らの言葉でカバン・モーケン(Kabang Moken^{*5})と呼ばれる。男性は嫁娶後に親元を離れ、自らの船を造るのが習わしであった。通常、一隻に一世帯が暮らしており、一〇隻ほどの家船を一人のポタオ(potao 年長者の意)が束ね、彼が

移動先や停泊地などを決定してきた。ただし、年中船の上で生活しているわけではなく、海の荒れる南西モンスーン期(雨季の五月から一〇月)は、島の入江や沿岸部に杭上家屋を建てて風濤をしのいでいた。

モーケンの生業活動は漁撈である。男性は海中で鰍漁を行い、女性や子ども達は砂浜や岩礁地帯で貝類を採集する(ベルナツィーク一九六八・二九)。彼らはそのようにして得た魚介類を自家消費するとともに、夜光貝やナマコといった一部の海産物を陸地定住者(主に華人とマレー人)と物々交換することで米を得るか、換金してきた。ところが近年、上述のようなモーケンの暮らしは大きく



図1 スリン諸島周辺地図

(注) 筆者作成。



図2 スリン諸島地図

(注) 筆者作成。

変わってきている。その変化を促す最大の契機となったのは、一九八〇年代に推し進められたタイ領アンダマン海域の国立公園化であった。国立公園に指定された地域と海域はモーケンの生活域と重なっており、指定区域内における漁撈活動や移動に制限が加えられるようになったのである。その一方で、国立公園指定域における観光活動は奨励され、国内外から流入する観光客の波は、アンダマン海域の隅々にまで押し寄せるようになった。その結果、漁撈だけで生活することが困難となったモーケンは、観光業に従事することで現金を稼ぐようになっていく。国立公園化は海洋資源採取の制限を強め、モーケン社会への貨幣経済の浸透を促した。現在ではモーケンのほとんどが船上生活を捨て、陸地に定着しつつある。観光客や役人といった本土の人間との接触機会が増えたこともあり、タイ語の会話能力を身につける者が増えていることも見逃せない趣向のひとつである。本稿で取り上げるスリン諸島のモーケン社会がその典型例である。次節で、スリン諸島に関する基礎的情報を記述する。

2 スリン諸島について

スリン諸島は五つの島から構成されている。みごとに発達した珊瑚礁が島々を囲んでおり、熱帯雨林が植生の九三

パーセントを占めている。また、タイ国内において珍しい動植物が確認されている場所でもある。豊かな天然資源に恵まれたスリン諸島は、モーケンにとって生活に必要な木材や海産物を得る適地のひとつであった。

ところが、豊潤な環境を守ることを目的として、スリン諸島は一九七一年に保護林地区に指定され、一九八一年には国立公園に指定された。指定区域の総面積は海域を含めて一三五平方キロメートル、そのうち陸地面積が三三平方キロメートルある。海洋国立公園に指定されたことで、モーケンのスリン諸島における漁撈活動とそれに伴う移動に制限が加わり、現在ではスリン諸島への陸地定着の度合いを高めている（鈴木二〇一〇）。

他方で一九八五年以降、北東モンsoon期（乾季の一月から四月）の間は一般人に開放されるようになり、島を訪れる観光客は年々増えていった（図3参照）。津波の影響により、二〇〇五年の訪問者数は急減したが、現在ではその数を取り戻してきている。島を訪れる多くの観光客はシュノーケリングやキャンプを主目的としているが、モーケン村落に足を運ぶ観光客も少なからずいる。風が強く波が荒い日にはシュノーケリングができないこともあるので、時間つぶしに村落を観光する場合が多い。観光できる一月から四月の間で、訪問客がとくに多い時期が年末年始とソンクラーン時期（タイにおける旧正月で四月一三日

から一五日）である。二〇〇四年末に発生したインド洋津波は、まさに観光シーズン真っ盛りであったスリン諸島を襲った。

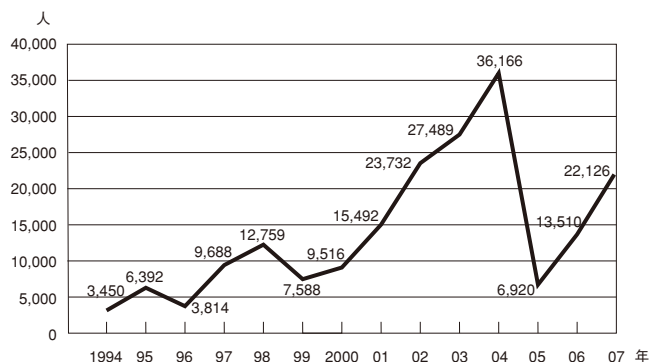


図3 スリン諸島に訪れた年度別観光客数の推移。

(注) 国立公園・野生動物植物局統計資料をもとに筆者作成。

III 津波と洪水神話ラブーン

二〇〇四年一月二六日、スマトラ島沖で発生したマグニチュード九超の地震は津波を生じさせ、インド洋沿岸諸国に被害を及ぼした。津波災害史上最大の犠牲者数を記録したが、津波の来襲を事前に察知し助かった人々もいた。その一集団がスリン諸島に暮らすモーケンである^{*8}。彼らはいったい、津波災害をどのように認識し、対処したのである^{*9}か。本節では、メディアによる報道内容とモーケンの語りの内容を比較する。

1 報道

津波来襲を回避したモーケンの逸話を最初に報道したのは、おそらくタイの英字新聞 *The Nation* (2005) である^{*9}。二〇〇五年一月一日付の同紙には「漂流民モーケンとして知られるタイの漁民の代々受け継がれた知識が、アジアの津波から村全体を救った」と書かれている。その知識とは、「もし潮が急速に引いたら、消えた分量の水が戻って来る」という年長者の教えであった。モーケンは、過去から連綿と伝達される海に関する知識を共有していたこと

で、命が救われたというのである。

この報道の後、日本でも同様の内容が伝えられている。

たとえば、朝日新聞（二〇〇五）では「異常な引き潮を見たら、山へ逃げろ」という先祖からの言い伝えが島民を救ったと紹介している。タイ字紙上でも、「津波^{*10}災害を免れたモーケンの方法」（傍点は筆者）という見出しがつけられ、「潮が早く引けば早く満ちてくる、潮が多く引けば大量の海水が戻って来る」という先祖代々伝わる口頭伝承を取り上げ、スリン諸島のモーケンが津波来襲を事前に察知していたことを報道した^{*11}（*Khon Chat Luek* 2005）。

タイにおける他の被災地では、突如干上がった砂浜に残された魚を漁る地元の人々や、潮の引いたビーチで遊び続けた観光客が多く犠牲になったのだが（cf. *The Nation* 2004:『朝日新聞』二〇〇四・柄谷二〇一〇:一四二）、モーケンはそれらの人々とは正反対の行動をとっていたのである。確認される犠牲者数が急増するなかで、スリン諸島のモーケンの逸話は世間の耳目を引いた。学識者のなかには「海の民（モーケン）のような自然に対する意識が発達した文化こそ最良の警報システム」だと主張する者まであらわれた（Wankaew 2005）。

ここで確認しておきたいことは、各報道で採用されている共通の論調である。それは、津波が災害であることを前提としており、モーケンの口頭伝承を災害と関連づけてい

る点である。しかしながら、インタビュアーに対してモーケンが発した言葉に災害や津波という単語は確認できない。それにもかかわらず、モーケンの口頭伝承と行動は、聞き取りを行った記者によってアプリオリに災害と結びつけられて解釈されたのである。モーケン社会に災害^{*12}文化がある^{*12}と想定し、それを強調することで、自然環境の兆候に反応が鈍くなっている現代社会に対し、警鐘を鳴らしていると解釈できる。報道におけるモーケンは、津波という災害に適切な対処をした人々として描かれているといえよう。

2 語り

モーケン自身によって語られる内容は報道のそれとどのように異なるのであろうか。先に答えをいってしまうと、筆者による聞き取り調査で明らかになったことは、報道で津波と伝えられていた出来事を、モーケンはラブーン（*labun*）として認識していたということである。

ラブーンとは、モーケン社会に代々口頭で伝えられるある神話の一部を指しており、全世界が海水で埋まるような洪水状態やそれを引き起こす巨大波を表すモーケン語の名詞でもある。物語の概要は、ラブーンに襲われたあとにひとつの島が残り、そこにモーケン、タイ人、西洋人、イン

ド人、日本人それぞれ一組ずつ生き残ったという、モーケンの起源を伝えるものとなっている。^{*13} この内容は、イヴァノフ (Ivanoff 2001: 343-344) が収集した「鶏などを船に詰め込み、大波と強風のなかを漂流し、ある島に辿り着いた後にモーケン、ビルマ人、華人、マレー人はそれぞれの土地へと散らばっていった」という“The Flood and the ‘Island of Fleas’”の話と重なる。この神話を記述するにあたり、彼自身はラブーンという言葉を書いていないが、キリスト教の影響を受けた物語ではないかと推測しているように、われわれに旧約聖書の創世記に記された洪水神話を想起させる内容となっている。では次に、具体的にどのような語りを筆者に聞かせてくれたのか見ていくことにしよう。

最も多く聞かされたのは、「潮が急に異常に引いたらラブーンが来る (*kaen chulek punamat labun nadin ka*)」という、メディアによる報道と似通った内容の口頭伝承であった。ただし、前述の記事内容と明らかに異なるのは、潮が引いた後に戻ってくるのは「消えた分量の水」や「大量の海水」などではなく「ラブーン」と言明している点である。モーケンは海の異変状態に気づいてラブーンが来ると思い、高台に逃げたのであった。

それにしても、洪水神話ラブーンがモーケンの日常生活にそこまで根づいていたもののだろうか、という疑問を

多くの読者は持つであろう。実は、神話内の出来事であるラブーンを、モーケンの現実世界に結びつけた強力な契機と理由があった。その答えは、津波前にモーケン社会で流布したゴン (Gon) による遺言とサラマ (Salama) による夢語りの内容にある。先述したように、スリン諸島のモーケン村落は規模が小さい。それ故に村落住民間における口伝による情報伝達が容易であり、人々の考え方に影響を与えやすいという特殊な環境にある点を先に指摘しておく。

遺言は、二〇〇四年一月二十六日の約一ヵ月前に死亡したゴンのものである。彼は原因不明の病を患い、次第に身体が弱くなっていた。そして自由に身体を動かすことができない状態にまで達し、「もし私が死んだらラブーンがやってくるだろう (*voi matui ka labun nadin ka*)」と村落内住民に語るようになっていたという。とりわけ死ぬ間際の一週間は、頻繁に村人に語っていたようである。シャーマン (*orang poti*) でもあった彼の言葉は村落内の人口に膾炙しており、村人は急激に引いた潮の光景を見てゴンの遺言を思い出し、急いで高台に向かったのであった。^{*14}

夢語りの内容とは、村落を壊滅させるような黄色い強風 (*ugin krang nunti*) が吹くというものである。この夢を見た人物はサラマといい、スリン諸島のモーケン村落において指導的立場にいる。彼は二月二十四日に「黄色い風」の夢を見て、近い将来に災いが村を襲うという予知を妻子に

伝えていた。そして妻子は近所にこの話を聞かせていたのである。サラマの息子のジョーク (Joek) は、父親の夢語りとゴンの遺言の内容から、近い将来にラブーンが訪れることを確信していたという。^{*15}

このようにゴンとサラマという村落で影響力のある二人の発言が、神話世界の出来事を日常世界の出来事に結びつけるきっかけをつくったと考えられる。ここでは、遺言や夢語りの信憑性を問うことはしない。確認すべき重要な点は、モーケンが波の事象を、メディアで報道されていたような津波災害としてではなく、口頭伝承において獲得した知識体系におけるラブーンとして捉えていたということである。津波や災害という概念を持ち合わせていないモーケンにとって、眼前で発生した現象は、自らの社会において理解可能な範疇内にある事象、ラブーン以外のなにものでもなかった。それは、モーケンの日常生活のなかに埋め込まれた物語の具象化であり、物理的要因（地震や海底の地滑りなど）によって発生する災害などではなかったのである。モーケンの語りから見えてくるのは、現実世界に来るべき洪水（神話）へ対応した人々の姿である。

IV 〈津波〉概念の構築

1 寺院への避難

津波が発生した当時、スリン諸島には一九九名のモーケンが暮らしていた。杭上家屋四七棟が全壊し、家財道具や舟を損失するなど物的被害は大きかったが、人的被害はなかった^{*16} (Narumon 2005)。高台へ逃げて助かったモーケンの多くが山のなかで一晚を過ごし、翌二七日に国立公園事務所が所有する船に乗り込みタイ本土へ向かった。バンガー県のカラブリ港に到着したモーケンは、同郡内では大規模の敷地を擁するサーマッキータム寺院（以下、S寺と略す）へ避難した（図1参照）。スリン諸島のモーケン以外にも、周辺海域で被災したタイ人やモーケンもS寺へ避難しており、二〇〇五年一月五日までに一〇〇〇人を超え^{*17}る人々が寺院にあふれかえったという。これらの人々を援助するために、タイ政府関係者や国内外のNGOがS寺を訪れるようになり、同寺院は災害被災者の支援が行われる場としての役割を果たすことになった。

スリン諸島から避難したモーケンは、寺院における支援を通じて巨大波 (khluen yak) や災害 (phai phibat) とい



写真1 矢印の下にある木製の看板。消えかけた文字で「津波被災センター：グラータレー（海を恐れないの意）」という名字を下賜されたプラトーン島行政区のモーケン族へのご支援をお願いします」と書かれている（2005年8月18日、筆者撮影）

う言葉と出会った。タイ語に堪能なングーイ（Ngaui）へのインタビュによると、寺院で住職やタイ人がラブーンを巨大波という言葉で表現していることを知り、次第にモーケン語で大波（*namat udu*）にあたるものだと思えるようになったと回想している。それから少し時間が経つと、支援団体を通じて「津波（*suenam*）」という言葉が寺院内で流通するようになり、S寺前の道路脇には「津波被災センター」と書かれた看板が掲げられるようになった（写真1）。避難先の寺院が、スリン諸島のモーケンにとっては何となく新鮮な記号に埋め尽くされた空間であったと想像することは難くない。「新しい」タイ語が寺院内に溢

れ、モーケンは各種支援（テントや食料など）を受けるなかで、自らが被災者（*phu prasop phai*）として扱われていることを自覚していったと考えられる。言語上の認識ではあるが、《津波》災害被災者としての自己を意識するようになったモーケンは、一月八日以降スリン諸島へ戻り始めることになった。

2 認識の変化

避難先で知得した巨大波や《津波》という言葉が、モーケンの認識体系に組み込まれていった様子は、彼らが発言した言説を時系列的に追うことで確認できる。まず、被災後に寺院で行われたインタビュー内容を見てみよう。

既述した「津波災害を免れたモーケンの方法」という一月四日付の記事では、すでに本稿の「黄色い夢」の節で紹介したサラマによるタイ語の語りが取り上げられている。この記事で印象的なのは、記者が津波（*suenam*）という言葉を使用してモーケンの災害回避行動を解説しようとしているのに対して、サラマは津波という言葉を使わずに用いていることなく、ただ「海水（*nam thale*）」が大きく引いて満ちた」としか説明していないことである（*Krom Chut Lueth* 2005）。

また、同時期にモーケン語による複数人へのインタ

ビューを行ったアンダマン・パイロット・プロジェクト (Andaman Pilot Project 以下APPと略す) リーダーのナルモン (Narumon Arunotai) は、モーケンがラブーン (labun) という言葉を用いて一二月二六日の出来事を説明していたことを伝えている (Narumon et al. 2006)。少なくとも寺院への避難直後においては、スリン諸島のモーケンは巨大波や〈津波〉というタイ語を使用しておらず、自分たちが回避したものをラブーンとして捉えていた姿を確認できる。

ところが、それから半年以上が過ぎたころには、言葉の使用に変化が見られる。筆者がクラブリ郡において津波被災者の体験談を収集していた二〇〇五年八月一日、体調を崩し病院に向かう途中のサラマに偶然再会し、タイ語で聞き取りを行うことができた。そこで彼が口にしたのは、一二月二六日にスリン諸島に向かって「巨大波が押し寄せてきた」ということや、「最近、ラジオで〈津波〉を注意する放送が流れるようになった」という新しい情報などであった (ラジオ情報については次節で論じる)。このように、巨大波や〈津波〉というタイ語を使用するようになっていたことを確かめられる。筆者が津波に関する言説を収集していることが前提にあるとはいえ、新聞記者に対する説明で用いていた言葉とは異なる表現をしていることがわかる。

それからしばらく経った二〇〇七年には、〈津波〉という言葉がモーケン社会に浸透していたことを確認できる。

先にも出てきたングーイは、スリン諸島に新しく設置された津波警報塔が誤作動を起こしたことに關して、「〔津波〕の警報がうるさい」と自分の言葉として〈津波〉を使用していた。^{*20}そして何よりも興味深いことに、サラマをはじめとする多くのモーケンが、二〇〇四年末にスリン諸島に押し寄せたのは「ラブーンではない (labun ka)」と発言するようになったことであった。ングーイによると、「ラブーンは全世界を飲み込むような洪水」なのであり、「ラブーンであれば、われわれ (モーケン) はみな助からない」というのである。だから、「あれは (タイ人が呼ぶような) 〈津波〉だった」と筆者に語るのであった。ここに、ラブーンから〈津波〉への認識の変化を読み取ることができる。^{*21}

V 〈津波〉情報の共有

それでは、スリン諸島のモーケン社会において〈津波〉という言葉はどの程度浸透しているのだろうか。また、〈津波〉に関する知識や概念をどのように認識し、共有しているのだろうか。本節ではまず、前節でサラマも言及した

ラジオによる津波情報に注目し、二〇〇七年九月一二日の出来事を事例として分析したい。そして、ブラジル人予言者による地震予知が、モーケン社会内で《津波》に結びついた二〇〇七年一二月の出来事を検討する。

1 ラジオによる津波情報

スリン諸島のモーケンはラジオをよく聞く。いくつかチャンネルがあるが、彼らが好んで聞くのはタイ語放送の MCOT Ranong 100.50FM（以下、MCOTと略す）である。この電波放送番組では、タイ全土に関わる情報のほか、ラノー県周辺地域の天気や事件がニュースとして流される。単一電池を数個詰め込んだ機器の電源を入れた状態にして、ほぼ一日中ラジオを流している家庭は決して少なくない。実際、筆者が長期滞在でお世話になったングーイ家もそうであった。外が明るくなるとラジオの電源が入り（ときには一晩中大音量でつけっぱなし）、MCOTが流れる。朝食を済ませ、外で作業することの多い昼時は電源を消しているのが普通だが、家にたまに戻ると再びラジオを聞きながら仲間とコーヒーを飲む。仕事を終え、暗くなる前に夕食と水浴びを済ませると、隣人がングーイ家に集まってラジオを聞きながら井戸端会議をする。そんな日常の一コマを過ごしていたある晩に地震・津波情報は流れ

た。二〇〇七年九月一二日のことである（地震が発生した現地時間は一八時一〇分）。以下、ラジオ情報を契機とした村落住民の動きを、フィールドノートをもとに、時系列に沿って箇条書きにして示す。

一九時四三分

突如、ングーイ家（以下、N家と略す）で寛いでいた人々が《津波》だ」といつて動き出す。皆家屋の外に出る。マゲアオ（Mangiao、ングーイの妻）から「地震（phaen din wai）が発生したとラジオで聞いた」と伝えられる。



写真2 左から2人目の左手の手元にあるのがラジオ。ルヌング氏は一番高い場所にいる人物（2007年9月17日、筆者撮影）

一九時四九分

ルヌング^{*22} (Lunung) 家 (以下、L家と略す) 人が集まりラジオを聴いている (写真2)。インドの方で地震があつたらしい。タイは安全とのこと (実際はインドネシアのスマトラ島沖、後に修正情報入る)。

一九時五一分

自分の家に戻ろうとする私をマゲアオが追いかけてきた。^{*23}「津波注意報が出て」ラジオで避難準備をした方がよいと言っていた」と伝えられる。村落が慌しくなる。皆が懐中電灯を手を持ち動き出す。

一九時五三分

N家へ行くと、別の家で飲酒していたンゴック^{*24} (Ngok) がN家に戻っていた。「きつと何も起こらないよ。日本では地震や〈津波〉がたくさん起こるんでしょ」と聞かれる。ングーイは懐中電灯に新しい電池を詰めこんで、非常時のために備えている。

二〇時二〇分ごろ

ラジオから「おそらく津波は発生しないでしょう」という音声が流れる。

二〇時三一分

L家に相当数集まっていた人たちが自分の家に戻り

出す。一部の人は、貴重品を荷物にまとめてからN家に来ていた。

これら一連の過程を追って気づくことが、少なくとも二点ある。それは、①地震発生後に津波が来るという因果関係を理解していることと、②災害国日本という知識を有していることである。

一九時四三分のラジオによる地震情報〈津波〉発言に結びついた有り様からは、彼らが災害に関するタイ語を理解している事実を確認できるほか、地震に伴う津波発生という物理的現象の関係を把握している様子が伺える。また、一九時五三分のンゴックの発言からは、日本が地震と津波を多く経験している国であることを知識として持っていることがわかる。彼は、本土に暮らす両親の家 (後述するC村) でテレビを見てそうした知識を得たという。

ンゴックが、「きつと何も起こらないよ」と言ったのには、単に酒に酔っていたわけではなく、それなりの理由がある。実は、それまでもラジオから津波注意報が流され、その度に避難準備をすすめるも何も起こらなかったということが三度あった。それらの日付は、二〇〇五年七月二四日、二〇〇六年五月二七日、二〇〇七年三月六日であり、それぞれニコバル諸島、ジャワ島中部、スマトラ島中部における地震発生後にM C O Tで津波情報が流されたの

である。ンゴックは経験則からラジオ情報が信用に足らないと考えていたことがわかる。結局、二〇〇七年九月二日も幸いにして、ンゴックの予測したとおり何も起こらなかった。結果として、スリン諸島のモーケンにとっては、ラジオから四回の「誤報」が流れたことになった。

2 ブラジル人予言者の報道

次に、二〇〇七年一月二日の出来事を見ていく。端緒は、二〇〇七年二月一二日にトゥンワー (Thungwa 以下、T村と略す) 村で開催された、NGO団体の女性基金 (M-lanithi Phuying 以下、MPと略す) 主催の会議である。会議では、男性による女性および子どもに対する暴力問題が取り上げられた。近年、アルコールへの依存度の高い男性による暴力が目立つようになっており、パンガー県各地のモーケン村落から代表者が集まり、アルコール摂取の問題性について話し合われた。この会議に、チャイパッタナー (Chai-phathana) 村 (以下、C村と略す) に暮らすジュリー (Julie) が同村落およびスリン諸島村落の代表として出席していた (図1参照)。ジュリーは、ングーイとンゴックの母親にあたる。この会議が終わる間際に、MPが参加者に配ったものが (写真3) の新聞記事のコピーであった。^{*25} 記事の概要は以下のとおりである。

「二〇〇七年一月二日、ブラジル人予言者が、二月二三日にスマトラ島沖でマグニチュード八・五の大地震が発生すると断言した。インドネシア当局はこの発言を受け、地域住民に避難訓練させる準備をしている。」

ジュリーはこの記事をC村に持ち帰り、内容を親族に伝えると一気に村落内を記事情報が駆け巡った。そして、村中で地震の話で持ち切りになっていた二月一日に、スリン諸島からC村へ移動した八名が記事内容を知ることになる。そのなかにはサラマとルヌングもいた。実は数日前にクラブリ郡の役人がスリン諸島のモーケン村落を訪れ、

นายเชษฐา โน นมรภา ลา สุข หมออดพั่งจิตชาวราซอวัย 45 ปี แถลง
เดือนเมษายน (21 พ.ย.) ว่า ตัวเองได้เห็นนิมิตของตัวเองทำให้
มันใจว่าจะเกิดแผ่นดินไหวรุนแรงขนาด 8.5 ริกเตอร์ ที่เกาะสุมาตราใน
วันที่ 23 ธันวาคม ที่จะถึงนี้ และตัวเองได้เคยส่งจดหมายผ่านสถานทูต
อินโดนีเซียในกรุงบราซียเลียเพื่อเตือนเจ้าหน้าที่อินโดนีเซียบนเกาะสุ
มาตรา จนทำให้ทางการอินโดนีเซียกำลังเตรียมซ้อมอพยพประชาชนให้
รับมือกับแผ่นดินไหวแล้ว

ก่อนหน้าถึงวันจันทร์ โฆษกของจังหวัดเบงกอล บนเกาะสุมาตรา ให้
สัมภาษณ์วิทยุเอเอส อีนดาว่าถึงจะเรียกคำพยากรณ์ของนายดา สุข ว่าแม่น
ข้าวสาลี แต่เจ้าหน้าที่ท้องถิ่นก็ให้ความสำคัญกับข่าวนี้ เพราะไม่ต้องการ
ถูกดำเนินหากเกิดเหตุการณ์ขึ้นจริง รวมทั้งจะจัดซ้อมอพยพประชาชนก่อน
จะถึงวันเกิดเหตุตามคำทำนายด้วย

写真3 MPが配った新聞記事のコピー (2007年12月23日、筆者撮影)

ガソリン代と引き換えに本土へ渡り選挙投票をするよう促されていたのである。^{*27} C村で一晩を過ごした八名はジュリーや他のモーケンからブラジル人予言者の話を聞かされたというわけである。

翌日一六日に八名はスリン諸島に戻った。彼らはC村で入手した記事内容を、「外人のシャーマン (orang poti kulu)」が発言したものとして村人に紹介し、一二月二三日に〈津波〉がスリン諸島を襲うと話した。シャーマンであるサラマヤルヌング自身がブラジル人を「外人のシャーマン」と紹介したことで、予言は村人にとって馴染みある「託宣」として容易に受容されたと考えられる。狭い村落内の隅々まで噂は広がり、〈津波〉に対する危機感が急速に高まっていった。

そんななか、一八日深夜に突然、「〈津波〉だ！」と叫ぶ声が闇夜に響き渡り、村落は騒然となる。眠りに就いていた者そうでない者みなが家屋を飛び出し、一目散に高台へ逃げ出した。ところが、声の主がみなの前にゆっくりと現れ「嘘だよ」と自白したことで、各自ぞろぞろと家に戻ったのであった。この騒動を起こした張本人に話を聞いてみると「ふざけてやった」らしいのだが、村落住民がいつせいに反応して動いてしまったので、嘘をついた本人が一番驚いたらしい。^{*28} この珍事件からも、スリン諸島のモーケン村落において〈津波〉がいかに身近なものとなっているか

が、わかるであろう。

流言飛語による混乱が落ち着いた後も、村落内では〈津波〉の話で持ち切りであった。いよいよ二三日当日になると、荷物を整理して避難に備える者もあらわれた。この日は快晴で海も穏やかであり、漁撈には適した状況にもかかわらず、村人は「あの日(二〇〇四年二月二六日)と同じような天気だ」と話し合っては、漁に出ようとしなかった。結局「外人」の予言は外れたのだが、二四日になって〈津波〉の話題は尽きなかった。

二五日になり、筆者がN家で朝食を済ませ、いつものように村人とコーヒーを飲んでみると、ここでも〈津波〉の話となった。そこでの会話は、津波警報塔やラジオ情報、そして「外人」の予言を否定する内容であった。つまり、これまで村落に入ってきたどの情報も当たったことはなく、信用ならないというのである。ングーイに関しては、「外人の世界 (bunga orang kulu)」の情報は外れるとまで発言した。外部社会から流入してきた津波に関する情報は、新しい〈津波〉概念を得たモーケン社会のなかでは頼りないものとして扱われるようになったといえよう。それでも、二六日はインド洋津波発生からちょうど三年ということもあり、「外人の世界」からやってきているはずの筆者に「〈津波〉来ないよね？」とたずねてくる者がいたのであった。

ここで確認したいことは二つある。それは、スリン諸島のモーケンが遠くの（位置を知らない）国の「外人」の予知する地震を〈津波〉に関連して想起したということが一点、そしてもうひとつは、外部社会とのつながりを認識しつつも、そこから入ってくる情報に対し「外人の世界」として一定の距離を置いている点である。

新聞記事には地震の予知が記されているだけであり、津波という言葉は一字も出ていない。それにもかかわらず、C村で記事内容を知ったスリン諸島のモーケンは〈津波〉発生の予言として解釈した。彼らにとって〈津波〉とは、地震に起因するものとしてすでに理解されていたと考えてよいであろう。また、インドネシアで発生した地震が津波を引き起こし、スリン諸島に押し寄せてくるという発想は、ラジオから繰り返し放送された津波情報を共有した結果であると考えられる。外部社会で起きる現象が自分たちにも影響を与えることを十分理解しているといえよう。ところが、そのような外部社会とある種のつながりを認めつつも、二五日のングーイの発言に代表されるように、自分たちの世界と「外人の世界」との間に差異を見出していることも見逃すことができない。

VI 考察

以上、津波被災直後におけるメディアの報道内容とモーケン自身の認識との間にある齟齬を確認し、モーケンが寺院で知得し、村落で発生した出来事を通して共有してきた〈津波〉概念の構築過程について論じてきた。ここでは、「創られた災害」という主題に注目することを通して、本稿で論述してきた内容に考察を加えたい。

1 二つの創られた〈災害〉

本稿の創られた災害という主題には二つの意味が込められている。ひとつは、メディア（主に新聞記者）によって創造された、モーケンが被ったとされる災害であり、もうひとつはモーケンが出来事を通して創り上げていった、ラブーンという理解にとって替わるものとしての〈災害〉である。

前者は、二〇〇四年一月二六日発生のインド洋津波を災害として位置づけ、モーケンの口頭伝承を災害概念の枠組内において理解するものであった。しかしながら、スリン諸島のモーケンにとっては津波などではなく、洪水神話

が現実世界へ到来したものにすぎなかった。ある程度予測された、やがて訪れるラブーンとして捉えられていた。

(少なくとも被災直後までは)彼らとっては晴天の霹靂の災害などではなかったのである。そもそも災害なる言葉を初めて知ったのは、S寺への避難後のことであつた。創られた災害というひとつめの意味をここに確認できる。

後者は、外部社会とのつながりのなかで、モーケン社会において認識され、共有されるようになった〈災害〉を指す。S寺における避難生活において知得した〈津波〉や〈災害〉という言葉は、その時点では抽象的なものでしかなかった。ところが、ラジオ情報や報道記事が導引した村落内の出来事を通して、モーケン社会で身近な事象として捉えられるようになり、概念化されたといえる。とはいえ、モーケン社会内で流通するようになった〈津波〉という概念は、二〇〇四年インド洋津波を経験したタイ人や研究者が用いるものとは同一ではない。身近な者を奪い去られた者が言及する津波と、幸いにも死者を出さずに済んだ、いまだ記号以上の意味合いを持たない者が言及する〈津波〉が別次元に位置する言葉であることは当然であろう。それだけでなく、科学的知識をもとに地球環境を理解してきた者と、「土地の知恵」を科学的知識に置換(ないし融合)したばかりの者が認識する災害概念がそれぞれ異なるということには留意する必要がある。スリン諸島の

モーケンは、ラブーンとして把捉していた事象を〈津波〉と捉えるようになったのであり、もともとは災害としての津波という見方はなかった。出来事を通して認識され共有された、いわば意味や知識が後づけされた概念の〈津波〉であつた。その意味で、モーケン社会で創られた〈災害〉なのである。

2 災害情報の越境性

これら二つの創られた〈災害〉は、それぞれ外部者と津波に被災した当事者が創造したものであるという点においては違いを指摘できるが、いずれも二つ以上の地域社会を越えた接触(直接的であれ間接的であれ)がきっかけとなり生み出されたものであるという点において共通項を見出せる。また、特定の地域を起点とする災害情報が、国境を越えて伝達した点も看過できない。

前者の災害は、バンコクを拠点とする会社に所属したタイ人のメディア関係者が、タイの地理的にも文化的にも周縁に位置するモーケン社会に触れたことで創造されたものである。タイ語を母語とする人間がそれを母語としない社会に入って取材をし、科学的な概念のもとモーケンの行動を理解した結果生まれた災害であつた。モーケンの記事は新聞として大量に印刷されて国内市場に出回っただけでな

く、電子媒体によって地球上を駆け巡り、それを読解可能な人間に対してモーケンの災害文化が伝えられた。タイ語、英語、日本語などを媒介として、創られた災害は言語化されたデータとして増殖し続け、モーケンにとっては想像されえない共同体内で記事情報が共有されていた。

ここまでモーケンが注目された理由に、彼らが都市社会とは大きく異なる文化を持ち、タイ国家のなかでもとりわけて辺境地帯に暮らす少数民族である、という背景があったことを指摘しておきたい。モーケンのように会話能力こそ持つものの読み書きのできない者が多く、国籍を有する絶対数も少ない人々は記事や番組の対象にこそなりえても、読者や視聴者と想定されることはまずない。実際、モーケンが津波発生を事前に察知し助かったという事実、科学による防災のあり方への批判・相対化材料としてメディアに取り上げられていた。そこで想定されている情報の消費者は、近代社会に暮らす科学的知識を有する人々である。非近代的な社会で起きた事件は近代社会において希少性ある情報として扱われた。そしてその情報は、グローバルな市場で高い商品価値が付与されることを通じ、多言語を媒介して世界各地で消費されたのである。

後者の〈災害〉は、モーケンが本土の寺院に避難し、タイ社会と接触を持ったことが契機となり創造されたものである。タイ語を理解するモーケンが軸となり、NGO関係

者やラジオ、新聞記事などから得た外部社会の情報がモーケン社会に伝達された。あるときはインドネシアで発生した地震情報であり、またある時はブラジル人が予想した地震予知の知らせであった。それらの「新奇」な災害の情報がモーケンの日常生活に入り込み、彼らにとつての〈災害〉概念が創り上げられ、強化されていった。スリン諸島というタイのなかでも非常に狭い空間が、災害情報を通じてグローバルな空間と接続してきた様子を確認できる。その意味で、モーケンはグローバリゼーションのなかで〈災害〉概念を構築してきたといえよう。

VII おわりに

こうして二つの〈災害〉の創造過程について考察を加えると、両者が一地域において成立したのではなく、越境的なヒトや情報の移動があつて初めて生成したことがよくわかる。また、いずれもグローバルな関係性のなかで創られたにもかかわらず、その概念のなかにローカルとグローバルとの間に潜む大きな断絶性があることに気づく。ひとつはグローバルな近代社会において価値を見出され一方的に決めつけられた災害であり、もうひとつはモーケン社会がグローバリゼーションを経験するなかで独自に手摺らえた

《災害》である。前者は外部社会が自らの価値観の型に嵌めてモーケンの行動を理解したものであり、モーケン社会の文化的認識とは懸隔があった。後者はモーケン社会で新しく拵えられた「自家製」のものであり、外部社会において使用されるそれとは巨大な逕庭がある。ローカルなモーケン社会とグローバルな外部社会は、災害の創造を通してつながりつつも離れるという、一見すると矛盾する二つの動きを同時並行的にすすめてきたといえる。二つの《災害》を通して見えるモーケンにとつてのグローバル化・シジョンとは、外部社会との接続と断絶の経験であつたと解釈することができのではないだろうか。

そこで気になることがある。それは、スリン諸島のモーケン社会では、外部社会との接続の経験よりも断絶の経験の方が強く作用しているのではないかということである。

確かに、ラジオや警報塔、それに新聞記事も含んだ津波発生を警告する「外人の世界の情報」は、スリン諸島のモーケンに外部社会とのつながりを意識させた。しかしそれと同時に、いずれの情報も「はずれる」ことで、モーケンは外部社会の情報に不信の念を抱くようになってきている。

V節の2で見たように、外人の世界の情報はあたらないというモーケンの発言からは、外部社会との接続の経験よりも断絶の経験を強く意識しているように推察できる。

もしそうだとするならば、スリン諸島のモーケンは新し

く《津波》概念を共有したことで、将来発生する津波に対するリスクを高めてしまっているという、逆説的な状況に置かれている可能性がある。《津波》概念を知得する以前ならば、ラブーンが襲つてきた時のように、環境の異常な変化を直接的に知覚することが身を守る唯一の方途であつたかもしれない。ところが、《津波》という科学的知識を吸収し、ラジオや警報塔などから津波情報が流される現在においては、外部からもたらされる情報から環境の変化を間接的に知覚する方法も身につける必要がある。筆者が憂慮していることは、モーケンが外から入つて来る津波情報を不確かな「外人の世界」の空言として捉えるようになり、実際に津波が襲ってくる際に逃げ遅れることである。

《津波》という新語を得たことによつて、モーケン社会にある種の災害脆弱性が生まれているのではないかと考える。これまでどおり、海や風などの状態の観察を怠ることなく、津波警報塔やラジオなどから発せられる情報にも一定の信頼をよせることが、モーケンにとつて《津波》概念と上手に付き合うひとつの方法であるように思う。

●付記

本稿は、二〇〇七年度富士ゼロックス小林節太郎記念基金
小林フェローシップ、二〇〇八～二〇〇九年度科学研究費補
助金特別研究員（DC2）『海民』モーケンが認知する環

境・リスク・歴史地図——GISを用いた空間人類学の試み」(研究代表者・鈴木佑記)と、二〇〇八―二〇一二年年度科学研究費補助金基盤研究(A)「大規模災害被災地における環境変化と脆弱性克服に関する研究」(研究代表者・林勲男)によって行われた研究成果の一部である。現地調査は、ナルモン(Dr. Narumon Arunotai)先生のご助力とタイ国学術審査会議(通称NRCT)の許可があつて可能となつた。

●注

*1 必ずしも自然現象を起因としないが、環境の変化が人間の生活に結びついた結果であるとする見方を確認すること
が、この定義を理解するうえで重要である。

*2 本稿では、モーケンが認識するようになったと考えられる概念を〈災害〉や〈津波〉と括弧づけで示し、学術分野や一般的に言及される括弧なしの災害や津波と区別する。また、メディアがモーケンの行動を災害に結びつけて言語化したものを災害と傍点をつけて示す。その他、〈災害〉はモーケンとメディアが創り上げたと考えられるものを一語で表したいときに用いる。

*3 出来事とは、個人的経験そのものではなく、他者と共有されるものであり、出来事には個々の出来事の重なりから共有される出来事が抽出され、固定化され、歴史化され、さらには神秘化されるプロセスがある(西井二〇〇七)。本稿では、グローバルな状況下におかれた被災社会において、外部社会と関わるうえで発生した出来事に注目し、その出来事を通して〈災害〉なるものが被災者間で抽出され、固定化さ

れ、歴史化されているプロセスを中心に報告する。

*4 同海域に暮らす民族集団には、モーケン以外にモクレンとウラク・ラウオイッがいる(鈴木二〇〇六)。この三分類は言語学的分類である。チュラーロンコーン大学社会調査研究所による人口推計は、モーケンが二八〇〇人(ミャンマー領二〇〇〇人、タイ領八〇〇人)、モクレンが二五〇〇人、ウラク・ラウオイッが四〇〇〇人である。

*5 以下、括弧内の正体で書かれたローマ字表記は英語およびタイ語を、斜体で書かれたものはモーケン語をそれぞれあらわす(引用文献を含まず)。ただし、人名に関してはどの言語も正体を用いる。

*6 元来「無文字社会」であつたモーケン社会でも、本土の小学校でタイ語を学ぶ若年層が増えており、聞き話しはもちろんのこと読み書き能力も習得するようになっていく。

*7 二〇〇四年インド洋津波の影響で二〇〇五年度の訪問者数が急減したが、二〇〇六年以降は徐々にその数を取り戻してきている。

*8 インドネシア、アチエ州シムル島においても、「スモン」と呼ばれる同様の内容を持つ口頭伝承が存在し、多くの人が助かっている。

*9 CNN(AP通信配信)も同日に同内容をインターネット上に公開した。アジアの津波とは二〇〇四年インド洋津波のことを指している。*The Nation*とCNNでは「Morgan」、朝日新聞では「モガン」という呼称が使用されているが、本稿ではすべてモーケン(Moken)に統一した。

*10 タイ語のローマ字表記では suenam。当初、津波ではな

く巨大波 (Kluen yab) という言葉が使用されていた。それ

まで、タイ社会において津波という現象はほとんど知られていなかったが、二〇〇五年に入るまでには発生のメカニズムや語源などの知識がメディアを通じて急速に普及していった。

*11 ただし、津波が発生する前に潮が大きく引くとは限らない。プレート境界型地震の場合、強い引き波を伴うことが一般的だが、プレート内部の破裂によって発生するスラブ内地震は、必ずしも大きな引き潮を伴うわけではない。

*12 災害文化とは、被災体験を通じてつくりだされる災害防衛のための知識体系である (林 一九八八)。過去にもアンダマン海域で津波が発生しており (Jankaw et al. 2008)、モーケンも小規模な津波を経験していることがわかっている (鈴木二〇一〇: 一七九—一八〇)。

*13 二〇〇九年二月一〇日のスリン諸島ボンヤイ村におけるドア (Dog) への筆者によるインタビューによる。筆者が日本人であることが、彼女の語りのなかに日本を登場させたものと考えられる。以下のインタビューもすべて筆者によるものである。

*14 二〇〇七年十一月二四日のスリン諸島ボンヤイ村におけるトーン (Thon) へのインタビューによる。

*15 二〇〇七年八月二七日のスリン諸島ボンヤイ村におけるジョークへのインタビューによる。ただしサラマに関しては、村の若年層からの信頼が年々なくなってきた。その背景には、ポタオの資質をめぐる問題があるが、その点については別稿でくわしく論じたい。サラマによる「黄色い風」の夢の話は、Nechan Sutsapda (2005: 71-73) でも取り上げ

られている。

*16 津波が直接の原因ではないが、目の不自由な男性が一人死亡した。津波時、村人とともに逃げて助かったが、山を下って避難する際、他の村人に存在を忘れられ、置き去りにされて死亡した。サイエーン湾とボンレック湾の二カ所にあったモーケン村落は、津波被災後に現在の場所へと統合された。その過程の詳細は鈴木 (二〇一〇) を参照のこと。

*17 二〇〇五年三月六日のS寺における住職へのインタビューによる。

*18 二〇〇八年八月一〇日のスリン諸島ボンヤイ村におけるインタビューによる。ングーイはミャンマー領マシュー島周辺で生まれた直後、タイ領の島嶼へ移動し、本土の学校でタイ語教育を受けた。一九九九年頃からスリン諸島に定住するようになったという。

*19 二〇〇五年三月八日にスリン諸島ボンヤイ村で会っている。

*20 二〇〇七年六月一二日のスリン諸島ボンヤイ村における会話。

*21 二〇〇九年二月上旬にスリン諸島を訪問した際に、年長者の一人がラホープ (lahop) と表現している場面に出くわした。高波を意味するモーケン語らしいが、若年層に聞き取りをしても、この言葉を知る者はいなかった。ところが、筆者のこの聞き取りを契機として、若いモーケンの間にラホープという言葉が徐々に浸透してきている。今後は、ラホープに関する調査も実施する予定である。

*22 ルヌングないしドゥヌング (Dunung) と呼ばれる、村

一番のシャーマンとされる初老の男性。

* 23 調査中は、基本的にはN家でホームステイをしていたが、二〇〇七年八月二三日から一月二六日の間は、N家の二軒隣の空き家に寝泊まりしていた。

* 24 ングーイの実弟。独身で持ち家がないため、兄の家屋で寝泊まりすることが多い。

* 25 MPが配ったコピーは新聞記事の一部であった。全文では、津波に言及している箇所もある (*Khon Chat Luak* 2007)。

* 26 ジェセリーノ (Jucelino Nóbrega da Luz) のこと。日本では、二〇〇六年一月三日放送の『ビートたけしのTVタックル』で紹介されて以降、各メディアに取り上げられている。彼は在伯インドネシア大使館に手紙を送って地震に警戒するよう忠告したところ、インドネシア政府が動いたのである。最初はインドネシア語やポルトガル語の新聞で取り上げられ、後にその内容が英語やタイ語に訳されたと考えられる。

* 27 二〇〇七年一月二三日に実施された下院総選挙の期日前投票のこと。当時、スリン諸島村落においてタイ市民証を所持していた者は約二〇名。そのうち、八名が期日前投票に出かけた。選挙に興味があったというよりも、ガソリン代無料で本土に渡ることができ、米や雑貨の仕入れを可能としたことが彼らを投票に向かわせた。このことは、一六日に実施した八名へのインタビューから明らかとなった。

* 28 一月二三日に行った村落住民への聞き取りによる。筆者は一八日から五日間、APPのメンバーと一緒に、スリン

諸島の一部のモーケン連れて、他地域の海民村落を訪問するという、スタディ・ツアーに参加していた。

●参考文献

オリヴァー・スミス、アンソニー・ホフマン、スザンナ・M (二〇〇六) 「序論：災害の人類学的研究の意義」ホフマン、スザンナ・M／オリヴァー・スミス、アンソニー編著『災害の人類学——カストロフィと文化』若林佳史訳、明石書店、七二―八頁。

柄谷友香 (二〇一〇) 「タイ南部における被災観光地での復興過程とその課題」林勲男編『自然災害と復興支援』みんぱく実践人類学シリーズ九、明石書店、一二七―一五四頁。

ベルナツィーク、H・A (一九六八) 「黄色い葉の精霊」大林太良訳、平凡社。

鈴木佑記 (二〇〇六) 「モーケン、モクレン、ウラク・ラウオイ——タイとビルマの海民の民族名称に関する考察」『年報タイ研究』六号、一四九―一六四頁。

—— (二〇一〇) 「悪い家屋」に住む——タイ・スリン諸島モーケン村落の動態」林勲男編『自然災害と復興支援』みんぱく実践人類学シリーズ九、明石書店、一五五―一八〇頁。

西井涼子 (二〇〇七) 「出来事」のエスノグラフィ——南タイにおけるエビ養殖という投機的行為の流れ」河合香史編『生きる場の人類学——土地と自然の認識・実践・表象過程』京都大学学術出版会、二九七―三三〇頁。

林春男 (一九八八) 「災害文化の形成」安部北夫・三隅二不二・岡部慶三編『自然災害の行動科学』応用心理学講座三、福村

出版'二四六二二六頁。

Ivanoff, Jacques (2001) *Rings of Coral: Moken Folktales*. Bangkok: White Lotus.

Jankaw, K., Atwater, B.F., Sawai, Y., Choowong, M., Charoentitrat, T., Martin, M.E., Prendergast, A. (2008) Medieval Forewarning of the 2004 Indian Ocean Tsunami in Thailand. *Nature* 455: 1228-1231.

Narumon, A., Phaladej, P. and Jirawan, B. (2006) *Chiwit Phuekroo Choo Mokaen: Mubo Surin Phanga* (われわれチーケンの生き方——バンガー県スリン諸島). Bangkok: Chulalongkorn University Social Research Institute.

Narumon, H. (2005) *Khomon Phuethan khaokap Mokaen, 3 Mokaekhom 2548*. (二〇〇五年一月三日付'モーケンに関する基礎情報) Bangkok: (Unpublished Document)

Nechan Sutsapda (2005) *Wan Klueu Sanghan: Bantuek Hayanaphai Chaiphang Andaman*. (殺人波にのまれた日——アンタメン海沿岸を襲った災害の記録) Bangkok: Nechanbuk. (新聞・ウェブサイト)

『朝日新聞』(二〇〇四)「年末リゾート直撃」(二月二七日)——(二〇〇五)「異常な引き潮見たら山く逃げろ」(一月一日)

CNN (2005) Sea Gypsies' Knowledge Saves Village (January 1) <http://www.cnn.com/2005/WORLD/asiapcf/01/01/sea.gypsies.ap/index.html> (January 15, 2005)

Khom Chat Luek (2005) Withi Chao Mokaen Chuaiphon Mahantaphai "Sunami" (「津波」災害を免れたモーケンの方法)

(January 4)

——(2007) Modu Phalangciyot Mean Brasin 23 Tho. Kho. Kuat Thoranphitot thi Indonesia (トビシルの究竟な予言者'二月十三日にインドネシアで災害が発生すると前知) (November 23)

The Nation (2004) A Matter of 30 Seconds: Tourists-Why weren't we warned? (December 29)

——(2005) Sea Gypsies' Knowledge Saves Village (January 1) Wankaew, Surichai (2005) Warthanatham Chalonsati khue Rabop Thueanphai Thsut (意識が発達させた文化'を最良の災害警報装置). *Matichon* (January 11)

(ササカ・ゆい子／上智大学アジア文化研究所)